

04 うちの手仕事、みんなの手仕事
竹でつくる魚籠

{おいしい ものの はなし}

なにが幸せって
おいしいものを食べる時の喜びは格別です。
サクサク、ポリポリ、むしゃむしゃ…、
つくった人の笑顔を思い浮かべながら。

06 1 りんごの木の下で ~善積農園

11 2 「土ころ」のパン

14 詩画集 水の函より

16 sakuRabitoさんとつくる 小さな箱庭

{きっと な であい}

18 おしらせ

19 えほん・おんがく

20 おみせ

22 ひと

24 けしき

26 小説 動物園 東 朔水

28 魔女くらぶ

魔女修行 高遠の和菓子屋さんめぐりの巻

分校館便り 点々の、、、 TANEの観察日記 魔女のレシピ

30 きっとまっぶ



何になりたい？

子供のころ、大人になったら何になりたいかと思っていたのだけ？
お嫁さん…？いやちがう。

先生…？やっぱり違う。

スチュワードレス…？考えたこともない。

看護婦さん…？注射は嫌いです。

お店屋さん…？何屋さんかなあ。

中学生の時は発掘隊の隊長になると意気込んでいた。

何の根拠もなかったし、勉強も全然できなかったのに。

高校生の時は大好きな女友達と一緒にいるのがうれしくて

「お茶屋さんをやろう！」と、わいわい話して楽しかった。

でも、何かになりたいわけではなかったな…。

そして何者にもならず大人になった。

ある時、そんな私よりずっと大人の人が

「今度生まれてくるときには…」と

大真面目に話してくれた。

少しあどけなくて、少しせつなくて。

いいな…と思った。

心が自由で素敵だな…と思った。

今度生まれてくるときには

あなたは何になりたいですか…。

りんごの木の下で

善積農園よしづみ



写真・きつと編集部

■りんごに会いに行く

「りんご畑を見に来ませんか？」初めて峰子さんに会った日、朗らかで柔らかな物腰の峰子さんに誘われていそいそと彼女の車の後に続いた。細い農道の坂道を登っていくと、一面にりんご畑の続くなだらかな平野が開ける。遠くアルプスの峰々に守られるように広がる平野。もともとは中央アルプスからの豊かな水を利用した水田が広がっていたのだろう。田んぼの面影の残る土地は、減反政策の進む中で果樹や野菜や花の畑に姿を変えていったのだという。降り注ぐ太陽のもと、どこまでも続くりんご畑と青い空。思わず両手を広げて深呼吸したくなるような光景だ。その畑の一角に峰子さん一家が営む善積農園のリンゴ畑がある。「お客さんにはやっぱり畑を見に来てほしいですね」と話しながら案内してくれる様子は、りんごに注ぐ愛情であふれている。

信州という土地に住んでいくらか時間の経つ私たちにとって、りんごは暮らしの中にごく普通にある果物になっていったし、りんご畑が広がる景色も珍しいものではなくなっていたはずなのに、

畑の中を歩くうちに何とも言えない新鮮な気持ち湧き上がってきて驚いてしまった。「峰子さん一家が作っているりんごを食べてみたい」そして何より「この一家をもっと知りたい」。紅玉が赤く実る幹の一本一本を愛おしそうに見つめながら話す峰子さんを見ていて、そんな気持ちが強く湧いてきた。

写真・善積峰子

■はじまりは一人と一匹

善積農園は、峰子さんの夫、湖戯人こぎとさんのお母さん、純子さんの物語に始まる。三年前、当時五〇歳の純子さんはそれまでの京都での暮らしを離れ、愛犬カナちゃん（？）で須坂にある長野県農業大学校へ入学した。「生涯現役で働ける仕事」そう考えて選んだのが農業だった。五〇歳で未経験で女性ひとり。家庭菜園をやるうというのではない。農業で暮らしを立てていくのだ。純子さんは「やればできる」という根拠のない自信があった」と屈託なく笑う。農業と言っても分野は広い。その中で純子さんが選んだのはりんごだった。最大の理由はりんごが好きだったこと。産地から送ってもらったりんごが美味しくてその味が忘れられなかったという。大好き

なりんごを思いつきり食べられる魅力は外せない。毎日食べても飽きないりんご、食べるほどに美味しく安心して食べられるりんご。純子さんはそんなりんごを作ろうと決めた。

一年後ここ宮田村に住居を見つけ、「宮田方式」という村独自の農地の貸出制度でりんご畑も借りることができた。その日から純子さんのりんご農家としての日々が始まったのだ。農業は兎にも角にも体を使う仕事だ。大きな機械を操作する場面もある。男手が必要なときは回りの人たちが助けてくれた。地区にりんご作りのグループがあり、勉強会や懇親会なども開かれていた。「周りの人たちに助けてもらいながらやってきた」と明るく話す純子さんだが、そうは言っても日々の労働は並大抵のことではなかったはずだし、一人ですべてのことをこなすための時間のやりくりや経済的なことなど、その苦労は想像に余りある。当初流通の確保に農協は大きな存在だったが、「友人や知人に差し上げたものが次につながっていく、口伝えで注文が入るようになっていったんです」と純子さん。それから九年ほどの間、純子さんは一人で行んごを作り続けた。もちろん忙しい時期には湖戯人



おいしいものはなし 2
 「土ころ」のパン



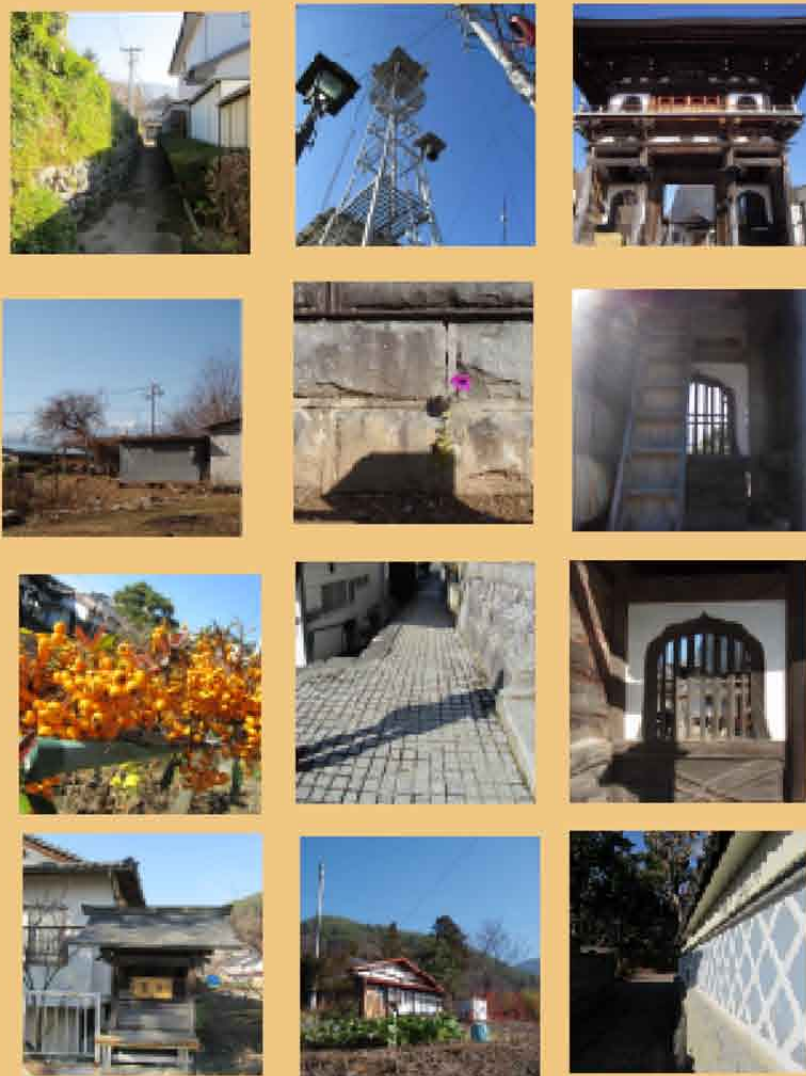
写真・きつと編集部

「すぐその信号を左に入ってカーブのあたりです」。

善積農園の峰子さん（前項参照）に教えてもらって訪ねたのは、自家製天然酵母のパン屋さん「土ころ」。

趣のある小さなお家と手作りの看板が目印の何ともかわいいうちパン屋さん。軒下につるされた柿のオレンジ色も美しかったな。初めて訪ねたのは秋のことでした。さてさてどんなパン屋さんなのでしょう。わくわくしながらお話をうかがいました。





私の好きな道～高遠散歩3

高遠 旭町あたり

車で走り抜けるとあっという間に通り過ぎてしまう小さなこの町は、実は奥が深い。豊かな自然はもちろん、歴史の足跡がいたるところに残っているし、細い路地に立ち並ぶ家々の佇まいからは文化の香りが漂ってくる。路地の町をのんびりと歩いていると、まだここが高遠城下だったころの風に不意に会えるような気がしてしまう。



杖突街道 みどがいと 御堂垣外宿 じゃやま 蛇山

天気がよくて気持ちのいい日。今日の予定は…、特になし。

「よし、蛇山に行こう」

おにぎりを握って、水筒にお茶を詰めたら、さあ出発。なだらかな稜線を歩いててもよし、急な近道コースを行ってもいい。子どもの足でも30分もかからずに登れてしまううちの裏山である。

頂上では大きな松の木が出迎えてくれる。いつも我が家を見守ってくれているやつだ。「おーい、来たよ」と挨拶して、弁当を広げる。眼下には杖突街道、遠く仙丈ヶ岳も見える。

かつてはここに山城が築かれ、戦国時代には武田軍をはじめ多くの軍兵が通っていったという。周りの山々を見ながら昔に思いを馳せるとゾクゾクする。

ひとしきりのんびりしたあと、少し軽くなったリュックを背負って山を下りる。

家に帰って見上げる蛇山は、いつもとちょっと違って見えるから不思議だ。

